【5】まとめ（今後の課題）

［1］以上、後世の雨安居地伝承の種々のヴァリエーションの検討から始めて、原始仏教聖典中の釈尊の雨安居に関する記述を列挙し、後世の雨安居地伝承と原始仏教聖典中に記された釈尊の雨安居地の対応関係を見てきた。また所在が問題となるいくつかの地については、それが今の何処に比定できるかを検討した。

［2］しかし本稿は未だ途中の段階であって、しっかりした結論を得るためにはさらに多くの作業を残していることを認めなければならない。

［2－1］一つは原始聖典資料に記された雨安居地のより高い精度の検討である。このためには一つ一つの経や律の記事の漢・パの対応関係とともに、その伝承そのものの対応関係の調査をしなければならない。例えば記事内容が同じでも雨安居地が異なる場合、その蓋然性を検討しなければならない。しかし今回はその検討を延期して、個別の記事を生のままで紹介するに止まった。

［2－2］そしてさらに、後世の雨安居地伝承が何を基にして形成されたのかを解明する作業も必要である。

我々は後世の雨安居地伝承が原始仏教聖典を基に作成されたのであろうという予想に基づいて作業を開始した。ところが予想に反して、雨安居地伝承中に挙げられたいくつかの地については原始仏教聖典中に釈尊がそこで雨安居を過ごされたとする記述がないことや、雨安居地伝承がある特定の地を特定の年代におく根拠が原始聖典中の記事に見出されないことなどが明らかになったため、その原因を探らなければならない。

あるいは失われて現在には残されていない原始聖典があったのか、（パーリとそのアッタカターにはそのような関係があったとは考えられないが）あるいは異部派の影響が入り込んでいるのか、それとも全くソースの異なる何らかの伝承があったのかなど幅広い検討を加えなければならない。

［2－3］これらについてはこの後直ちに着手する。学界諸賢のご教示を切にお願いしたい。